

第3章 マリア観音と天草の隠れキリシタン信仰

——サンタ・マリア館所蔵資料を中心に——

沈 薇 薇

1587年（天正15）豊臣秀吉のバテレン追放令から、日本におけるキリスト教の布教が一変した。それから宣教禁制の時期に入り、そして1612年（慶長17）および翌年の江戸幕府による禁教令で、外国人宣教師と日本のキリシタン大名が追放、改宗させられ、日本のキリスト教（当時はカトリック）禁教の時代が始まった。1638年（寛永15）島原天草一揆の後、禁教の対象が民衆にまで拡大し、幕府は宗門改め制度を導入し、踏み絵・檀家登録の手段により、民衆の宗教および身分をコントロールするようになった。したがって、このような厳しい状況のなか、日本の信徒は密かに先祖から伝えられてきたキリスト教の信仰を維持し、潜伏キリシタン或いは通称の隠れキリシタンとなった。隠れキリシタンは秘蔵の宣教師から得た宗教遺物、教義に関する本をキープし、残存の同信会の村組織コンフラリアに頼って宗教の教えを維持したが、宣教師もなく、バチカンとの連絡が断絶されたため、その信徒たちの宗教生活は民間信仰の形態となった。また、江戸幕府に異端と見なされた自分の宗教を隠すため、彼等はいろいろな信仰を偽装する工夫もした。そのような変形した信仰が伝えられた結果、日本独自の隠れキリシタン信仰となった。それには、「マリア観音」という、隠れキリシタンたちに崇拝された子安観音像がまさにその信仰の特徴となった。

田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』（日本学術振興会 1954年）によると、隠れキリシタンの信仰は主に伝承された宣教師の遺物、聖画像などを納戸の棚に祀る「納戸神」を信仰する平戸・生月地方と、カトリックの教暦を持ち、カトリックの宗教時間を厳守し、日繰帳信仰を中心とする長崎・黒崎地方および五島列島に分かれた。マリア観音の崇拝もその日繰帳信仰派の一つの特徴である。本章では、天草市有明町のサンタ・マリア館に所蔵されるマリア観音コレクションと、浜崎献作館長の研究から、信仰としてのマリア観音の実像について展開していきたい。

一、マリア観音の伝来と変容の歴史

マリア観音は主に明朝時代の中国から舶来した白磁や青磁の慈母観音像である。伝来した観音像は子供を抱く姿勢の神像であるゆえ、隠れキリシタンにとっては聖母マリアとして崇拝された。その伝来ルートについて、若桑みどり『聖母像の到来』（青土社 2008年）によると、当時中国船の日本貿易はオランダ商館と手を組んだ鄭芝龍一族に壟断され、福州・泉州からの「福建船」を中心に長崎への貿易が展

開されていた。また、1654年（承応3）、隠元来日の影響から、中国産の仏教美術品が伝来して、そのうち白磁観音も日本に輸入されるようになった可能性が高い。したがって、福建省から大量に同じ様式の観音像が日本に輸出されたとみて良いだろう。また、日本製の観音像も発見されたことから、福建の観音像が伝来して以後、日本で同様の観音像が製作されるようになったことが分かる。

サンタ・マリア館に所蔵されているマリア観音像は、長崎・天草地域の隠れキリシタンの子孫から収集したコレクションである。これらの所蔵資料を考察すると、天草地域内にも典型的な「マリア観音」、つまり福建産の白磁仏像（写真1）が一番多い。そのほかに、白磁仏像の形態に近い木造観音像（写真2）、観音の銅像や、交趾焼の三彩仏像（写真3）も同じように「マリア様」として崇拝される例が見られる。そして、これら仏像と完全に造形が違い、子供に慈愛を与える母性を表現する天草人形の「山姥」（写真4）も当地の隠れキリシタンによってマリア像として棚に安置され、崇拝されることがあった。これらの天草人形は天草独自の隠れキリシタンの象徴として重要な資料である。

しかし、様々なバリエーションに変容しても、当時の隠れキリシタンの人たちにとっては、それらの仏像はすべて聖母の「マリア」であることに間違いはない。内面の「マリア」と外見の「観音」を接続し、「マリア観音」ということばを作り出したのは後世の研究者である。だが、それらの仏像の内面に託された意味と、外見の差異の真相に、最初に気付いたのは幕府の官吏たちだった。17世紀中期から、隠れキリシタンの信仰が密告によって摘発されてきた。大量の信徒の存在が暴かれたことは一般的に「崩れ」といわれる。どのような手段で信仰を隠しても、信徒の行為と崇拝する物に一般人が異様を感じられるだろうか。「崩れ」の発端となるのは、「異仏事件」といわれ、カクレの信徒は仏教ではないものを祀っていたことが明らかになった。1657年（明暦3）の「郡崩れ」事件で、村民が所有している「キリシタン絵」など信徒である証拠が発見され、大量の信徒の実態が暴かれた。それは大村のキリシタンが破滅させられるほどの大きな事件だった。また1805年（文化2）崎津・今富・大江・高浜の「天草崩れ」では、5000人を超える隠れキリシタンが巻き込まれたといわれ、幕府に上申した結果「愚昧の者どもが心得違いをしていた」と判断し、踏絵と改心の誓約をさせた。江戸時代後期、幕府の奉行所は大きな事件や一揆にならないように、民間レベルの信仰の統制に対し相対的に寛大な態度をとった。「異仏発見」によって起きた1859年（安政6）前後の浦上三番崩れの結果は、「異宗」と判定された人たちに数日間の入牢と過料を支払うよう処罰を下した。奉行所側も信徒側もその「異宗」がキリシタン信仰であることを承認するまで辿りつかなかったのである。そして、1867年（慶応3）に浦上信徒発見事件が発生し、カクレの信徒が自分がキリスト教徒であることを承認・告白するようになった。それは宣教師の再来によって発生した浦上四番崩れといわれる。したがって、隠れキリシタンは幕府の命令と措置に面従腹背し、「マリア観音」のように隠れた姿でキリシタンの信仰を伝承していき、明治維新後の1874年（明治7）に禁教の高札が撤去されるまでその信仰を継続することが出来た。マリア観音もそのまま信徒の家庭の中で代々伝承することが出来たが、教会に帰還した日本の潜伏キリシタンの人びとにとっては、マリア観音の存在は間違いとなり、信仰の対象からはずされたことだろう。そして、教会の正統に戻らず、先祖から伝わって信仰習慣をもつ隠れキリシタンの人たちにとっては、マリア観音の宗教的正当性は依然存在していたのではないだろうか。



写真1



写真2



写真3



写真4

二、カクレ信仰のマリア像

サンタ・マリア館では、隠れキリシタンの信仰を代表する、マリア観音や秘仏秘神の像など約150点が展示されている。禁教時代の日本で密かに継続していたキリスト教（カトリック）の信仰の変容形態がそれらの神仏像に濃縮されているといえよう。

民間レベルの宗教生活では、犠牲・殉教の一面を代表するイエスより、救済・慈愛を感じられるマリアへの信仰が顕著である。マリア像は生老病死等の人々の生活に密着し、当地文化と混和して土着化する傾向が強い。例えば、聖母の顔立ち、肌色、衣装が当地の人々に同化され、変容することがある。それは日本だけではなく、南アメリカにおける宣教の歴史にもよく似た展開がみられる。日本における聖母像の変容の特徴といえば、禁教時代のキリシタンが信仰を偽装するため、あえて聖母を他宗教の仏像と融合した習合仏として祀られたことである。その中に、中国から伝来された子安観音をキリスト教の聖母像と重ね合わせ、作り出されたのが歴史上では異例の「マリア観音」だった。

若桑みどり¹⁾によると、美術史研究の観点から、マリア観音の典型的な造形は主に三種類に分けられている。第一種は子供を抱いていない、足元に波または雲の土台があり、胸元に瓔珞を垂らしている観音単体の立像である、第二種は片膝を立て、片手で子供を抱く座像、第三種は玉座に座り、足が竜に踏み、子供を抱いている以外、観音の両側に小童が従える像である。民間で観音信仰が盛んである中国からみれば、慈母観音といい、子安観音といい、いずれも正真正銘の観音菩薩像である。舶来品として日本に伝来して以降、禁教時期の隠れキリシタンにとって、救済と慈しみの感情が溢れる観音像の造形はマリアのイメージを彷彿とさせるため、観音像をマリア信仰と融和し、習合仏になったと思われる。

そして、サンタ・マリア館には、観音像に近似的な仏像、例えば中国民間信仰の子授け神「送子娘娘」、飛天像、菩薩像、地藏菩薩などの仏像と「マリア」のイメージに融合した例もみられる。

また、天草の隠れキリシタンにとって、マリアは観音の姿以外に、もう一つの形態がある。それは天草人形だった。浜崎献作の調査²⁾によると、天草人形は江戸時代中期の享保年間（1716-36）、肥前唐津の浪人広田和平が新休村東向寺前に創始した窯焼きの泥人形であり、一種の郷土玩具だった。様々なキャラクターの人形の中、子供に哺乳姿の山姥（やまんば）がマリア像の代わりに隠れキリシタンの人たちに礼拝されていた。山姥の造形は長い髪を被り、五彩の服を着る、豊満な胸を露わにして子供を抱く、或いは哺乳する女性姿の泥人形である。つまり、天草人形は伝来の観音像と違い、本来宗教となんの関係もなかった泥人形が宗教化された。玩具の人形が神聖のマリアと融合したことは民間信仰の発展と変容の様子を提示している。

このような一見キリスト教と関係のない観音像、仏像、あるいは人形にマリアのイメージを重ね合わせ、祀ることがマリア観音信仰の実態である。サンタ・マリア館の秘仏コレクションには、それ以外に「納戸神」として祀られたもう一種のマリア像の土着化のケースがある。

1) 若桑みどり『聖母像の到来』青土社 2008年、342-344ページ。

2) サンタ・マリア館の天草人形の展示説明文を参照。

三、マリア観音と「納戸神」の相違

前述の通り、田北の研究では、隠れキリシタンの信仰は「日繰帳」を信仰の中心にする長崎・黒崎地方と五島列島、そして「納戸神」を信仰の中心にする生月・平戸地方に分けられている。「納戸神」（なんどがみ）とは納戸に祀られる神の意味で、普通は恵比寿や大黒などを祀るが、隠れキリシタンは「御前様」と呼ばれる聖画像や聖像、或いは宣教関係の聖物（聖水・ロザリオの玄義を書いた木の小札・ロザリオの数珠・紙の十字架・苦行の鞭——オテンペシヤ）などを納戸に納め、自分の信仰を維持する。

納戸に掛けられた「聖画像」は聖母像と聖人像の題材で、本来は宣教時代の遺物と日本の信徒が書いた絵の両方を使っていた。特にイエズス会宣教師たちによる文化融合策の背景も手伝い、最初から日本で製作された聖画像に衣装や人物の容姿が日本式という特徴があった。そして歳月を経ち、旧有の絵が「お洗濯」（修復）をされ、ますます日本化、土着化にされてきた。

同じカクレの信徒に崇拝されていた聖像でありながら、マリア観音と「御前様」はかなりの違いがある。以下に特徴をまとめよう。

- 1、最も顕著な違いは、マリア観音（天草人形も含め）は外見からキリスト教の特徴が殆どなく、「御前様」の聖像には必ずクロスなどキリシタン信仰を表すエレメントが含まれている。よって、同じ観音像だが、（写真5）の観音像は背後に改造設置があって、ロザリオを隠す容器となった。（写真6）の特製の厨子が仏像を納めることによって聖杯の形を隠す。「御前様」の場合、仏像は



写真5



写真6

キリシタンの証を隠すための掩護となった、マリア観音のように観音像と「マリア様」のイメージに融合し、マリアとして崇拝されることは完全に別のことである。

- 2、マリア観音は通常、信徒の家に置き、崇拝されているが、田北の研究が指摘したように、「納戸神」はすべての家になく、30または40軒の信徒で構成される団体のうち、「御番役」(男性)という団体長老のような指導者がいて、「納戸神」の保存と行事を手配する。「御番役」以外の人は「納戸神」に触れることが禁止される。
- 3、美術の視点から見ると、マリア観音は中国から舶来した観音造形の仏像をそのまま使うが、「納戸神」の聖母像は宣教時代に教えられた宗教画像の題材を模倣し、そして日本化の変容を加え、「無原罪の聖母」や「聖ルカの聖母像」などの西洋と同じ題材を共用しても、日本独自の隠れキリシタンの風格となった。
- 4、地域の分別が挙げられる。マリア観音を信仰していた地方では「御前様」を掛けて崇拝することがない。宮崎賢太郎³⁾によると聖画像を「納戸神」として崇拝する生月では、マリア観音がない。それに反して、マリア観音像がよく見られる外海・五島地方では「掛軸を御神体として壇に祀ることがない」とされる。

従来の研究が指摘した通り、長崎・天草地方は人の出入りが比較的頻繁で、隠れキリシタンの信仰が人前に暴かれる危険性が高いため、「納戸神」のように聖画像を掛けるような行為は当然出来ないから、信仰を偽装する工夫が必要であった。そのため、中国から伝来された慈母観音(子安観音)像をマリアとして祀ることになったという一説がある。以上から見ると、長崎・天草地方と平戸・生月地方の隠れキリシタンの宗教生活の形態もかなりの相違が生じている。しかし、宗教信仰の発展には必ずいろいろな曖昧な「異物」と融合することがある。その聖像の形が違いとしても、隠れキリシタンの人にとっては同じ信仰の「マリア様」であるに違いない。

四、マリア観音と隠れキリシタンの信仰生活

それでは、マリア観音はどのように隠れキリシタンの家で祀られていたのか。宮崎の研究では長崎市内中心部の家野町にあるカクレキリシタンの一家の祭壇について、以下のように述べている。

「…祭壇は興味深い。カクレと仏教とカトリックの融合したものである。祭壇は三段になっており、最上段中央に先祖伝来のマリヤ観音、左には厨子に入ったカトリックのマリヤ像、右にはこれもカトリックの木像の聖母子像とロザリオ、スカプラリオ、御絵、ルルドの聖水瓶。これらはカトリック関係者が与えたものであろうが、カクレと関係ないものとせずあわせて祀っていた。中段には先祖代々の位牌と遺影が置かれ、御神酒、ご飯、水などが供えられている。下段の中央には香炉、鉦が置かれ、ロウソクも準備されており、花と果物が供えられている。」⁴⁾

3) 宮崎賢太郎『カクレキリシタン オラショ——魂の通奏低音』長崎新聞社 2001年、133-134ページ。

4) 注3 宮崎著書253ページ。

サンタマリア館では、(写真7)のように、「祈りの部屋」という天草の典型的なカクレキリシタンの家庭祭壇をシンプルに模倣し、陳列する展示コーナーがある。博物館の展示であるゆえ、家を印象付ける先祖の写真やご飯のお供えなどはないが、基本的な設置形式は宮崎の示した記録と同様、三段の棚に、カトリックのマリア像・イエス受難の十字架、白磁マリア観音と天草人形が祀られている、周りにロウソクと花が供えており、祭壇前に「祈りのうきクルス聖水鉢置き場」があり、そこに聖水鉢が置かれ、祭壇の上にカトリックの聖母像などが飾っている。カクレキリシタンの人がその祭壇に向け、礼拝や行事をする時、聖水鉢の水面に十字架を書く習慣があるといわれている。



写真7

このような祭壇の配置から、隠れキリシタンの信仰の複合性が見られる。宮崎の指摘通り、教会と離れ、宣教師もいない状態で、隠れキリシタンは地下で自分の宗教活動を行う。彼らにとって、先祖のキリシタンたちから伝えられてきたオラシヨの伝承とキリシタンの行事の維持は信仰を継続する主要な方法である。そして、自分の信仰を隠すため、幕府による踏絵、檀家登録制度などに彼らも普通の人と同様に参加し、日本伝統の行事にも参加していた。そして、数代の歳月を経て、隠れキリシタンの子孫たちがますます自然にこのような複合の宗教生活を当たり前のように過ごしてきた。先祖から伝わってきたものを完全に信じ、それらを区別せずに生きていた。

隠れキリシタン信仰における変容の結果、呪いなどの術が使われるようになった。そして、村のキリシタン組織がそれぞれに地下で活動していたため、訛りが混じったオラシヨもそうであるし、儀式の仕度などが各地域によって違いがある。例えば前述の長崎市家野町の隠れキリシタン宅では、マリア観音像を普段は墓に納め、命日に取り出し、新しい半紙にのせ、集まった人に回し、おでこに押しながら決めることば「死したる時は、お見知りになってくださいませ」という。その観音をのせた半紙には力を持って、焼いてのむとアニマの功德になると伝えられてきた。これは独自のマリア観音を使う呪いのよ

うな信仰儀式だった⁵⁾。

また、自分が踏み絵や仏教、神道の行事に無事参加したことに対し、自分の宗教生活のためについた「嘘」の罪を消すつもりで、隠れキリシタンの人たちはいろいろな呪術に近いことをやるようになった。例えば、踏絵の罪を帳消しにするため、踏絵に行くときは新しい草鞋を履き、家に帰るからその草鞋を炊き、汁を飲むという話である。隠れキリシタンの人たちは葬式の時、影で集まって、経消しの壺を使い、十字架を往復に壺の水の中に浸しながら、オラショを唱えて、仏教僧侶からの経文を消すと伝えられる。⁶⁾

隠れキリシタンの人たちはこのようにいろいろな工夫をして三百年間近くの禁教時代を乗り越えた。しかし、宣教師再来が実現し、信仰自由の時代になって以降、隠れキリシタンの人たちのアイデンティティーに変化が発生した。自分が守ってきたのはキリシタン信仰より、カトリックより、自分の先祖から伝えられてきたものであることに気付き、相当の隠れキリシタンの人たちは教会に戻らず、カクレのまま、代々伝えられてきた生活を送っていく。その自認識におけるアイデンティティーの変化について、宣教師再来後、教会に戻るかについて分岐が発生したことを分水嶺とし、それ以前のすべての隠れキリシタンを潜伏キリシタンという。その後教会に戻らず、自分の宗教のスタイルをキープしたままの人たちを隠れキリシタンという分類方法もある。それらの隠れキリシタンの子孫たちは現代までその信仰を維持しながら生き延びているが、宮崎の調査によると、情報化社会の現代に入ると、日常生活の変化とともに、隠れキリシタンの団体が年々少なくなっていき、隠れキリシタンは個人で信仰を継続する以外、大抵は普通の日本人のように仏教徒になるか、神社の氏子になる（割合は8：2という）。またごく少数のカクレ信徒はカトリックになるといわれる。

最後に、まとめとして、隠れキリシタンの信仰の性質について述べたい。

隠れキリシタンの信仰について、彼らの宗教生活に特殊性があり、いろいろな民間信仰と土着化する傾向が強いため、クリスチャン（カトリック）ではないという主張が聞こえる。だが、自分は「キリシタン」であるアイデンティティーを強い意志でキープし、教会との連絡が断絶された長い禁教時代を乗り越えたことから考えると、その宗教意識の強さはやはり簡単に否定できない。この矛盾はまるでマリア観音のようで、絶対キリシタンではない形をして、救済の化身マリアとして、キリシタンの芯をもっている。

サンタ・マリア館の浜崎献作館長にインタビューした時、その問題について、彼は隠れキリシタンの信仰はキリスト教宣教史におけるひとつの特殊発展ではないかと提示した。浜崎の研究は天草キリシタンの伝承オラショと墓場のキリシタンにみえる特徴に集中している。彼の調査によって、隠れキリシタンの人たちは葬儀から墓場まで様々な工夫をして、自分がキリシタンであることを主張していた。その目的はなによりも最後の天国に導いている。天国への憧れと聖母マリアの崇拝は隠れキリシタン信仰に宗教性が集中している部分だと思う。民間大衆には、大義名分より、救済への願望が強い。いずれの宗教にしても、民間レベルの伝播にこのような性格がみられる。

5) 注3 宮崎著書251ページ。

6) 浜崎献作氏インタビュー記録による。

そして、マリア観音のような一見奇妙な信仰は宗教の歴史において、あるいは日本の歴史においても特殊な存在である。隠れキリシタン信仰の象徴として、マリア観音崇拝の形成、マリア観音における変化は隠れキリシタンの歴史そのものと同様、日本の歴史に重要でかつ特殊な一章であろう。

【参考資料】

浜崎献作『天草の伝承キリシタンとオラショ——その変容と消滅／石に遺された信仰の証——』サンタマリア館 2003年
若桑みどり『聖母像の到来』青土社 2008年
宮崎賢太郎『カクレキリシタン オラショ——魂の通奏低音』長崎新聞社 2001年
2010年7月27日サンタ・マリア館フィールドワーク写真資料と浜崎献作氏インタビューレコーディングデータ

